

マンガ作品の展示に関する研究

マンガ施設・マンガ展の現状と傾向を通して

7091 鎌倉 陵

指導教員 助教 佐藤慎也

1. はじめに

近年、マンガがアートの空間に登場することは特別なことではなくなっている。内閣府や経済産業省、外務省、文化庁などでは、様々な形でマンガによる振興を図っており、注目を集めている。社会的なバッシングの対象となっていた時代とは、大きくその認識が変わっており、マンガの持つ経済的・芸術的価値の高さは、すでに公認されていると言える。

常設的にマンガをテーマとして扱う文化施設（以下、マンガ施設）は、1966年に開館した「さいたま市立漫画会館」が始まりである。以来、主に個々のマンガ家やマンガ作品を対象に、その作品や資料の収集、保存を目的として、全国的に広がりを見せた。現在では、行政レベルでも大きな動きが見られるようになり。2006年に建設された「京都国際マンガミュージアム」を初め、「北九州漫画ミュージアム」設立構想の発表（2007年）、「明治大学米沢嘉博記念図書館」の設立（2009年）、「国立メディア総合芸術センター」設立の予算化など、マンガを文化財として体系的に収集・研究し、総合的に展示・紹介する公的な文化施設の建設・計画が行われるようになった。

一方でマンガの展覧会（以下、マンガ展）については、1990年、国立の美術館で初めて行われるマンガ展として、東京国立近代美術館「手塚治虫展」が開催された。それを皮切りに、公立の美術館、あるいはギャラリーなどで、他の分野の美術展覧会と同等の規模でマンガ展が開かれるようになった。当初は原画の展示が主だったが、現在その内容は映像、音楽、立体造形、インスタレーション、さらにはライブラリースペースを設けるなど、他の美術展と比べて多種多様である。

また、海外でのマンガに対する関心や評価の高まりを受け、日本国内でマンガが再評価され、文化として世界に誇るコンテンツとして確立している。或いは高い集客力を期待できるマンガ展が、美術館の存在意義を証明する手段として見なされていることもある。

2. 研究目的

マンガは本来、複製芸術として捉えられる以前に、読み物としての娯楽作品である。そして、そのマンガを出発とし、雑誌、コミックス、キャラクター商品、映像、ゲームなど幅広い展開が行われている。現在ではマンガを展示する場合、その展開に対応するように多様な内容となっている。

しかし、マンガ施設やマンガ展は幅広い世代が利用するにも関わらず、両者を対象とする研究は少なく、包括的な調査研究が必要と考えられる。

本研究では、マンガ施設とマンガ展の両者に視点を置き、特に展示種別を中心に研究を進めるものである。違いや傾向を明確しながら、両者の現状を把握し、今後のマンガ施設の、及びマンガ展のあり方に関する手掛かりとなることを期待する。

なお、本論で取り扱う「マンガ」については、絵と文字を使用したもの、ストーリーマンガ、絵本、カリカチュア（戯画）、紙芝居、風刺画など静的なものを指す。アニメーションもマンガに類する分野として、現在マンガと不可分な関係にあるといえる。しかし本研究では、マンガの「読む」という体験から、展示の「観る」へ移った場合、紙媒体からどのような展示物へと変化が見られるかを探るものであり、映像が表現の中心となる動的な作品は除外する。

3. 研究対象

マンガ施設については、『マンガとミュージアムが会おうとき』及び、『全国まんがMAP』を参考に選定し、全46件の施設を調査対象とする。

マンガ展については『美術手帖』、及び『文化庁メディア芸術プラザHP』¹⁾を参考に選定した、全32展を対象とする。

4. 研究方法

表1. 展示作品の種別の分類

作品に関連性が高い種別	1. 原画 2. 原画（ダッシュ） 3. 絵画・イラスト類 4. 原画のシークエンス展示
作家に関連性が高い種別	5. 作家・作品経歴紹介 6. 作家愛蔵品 7. 作家書籍再現
マンガ作品	8. 雑誌・単行本（閲覧用） 9. 雑誌・単行本（展示用）
作家・作品から派生した種別	10. 広告 11. 音楽 12. 映像 13. 写真 14. モニュメント 15. インスタレーション 16. キャラクター立体造形物 17. 建物など立体造形物 18. その他立体造形物
その他	19. その他

調査方法は文献調査、Web調査を行い、マンガ施設・マンガ展の状況について整理をする。次に実地

踏査、ヒアリング調査を行い、マンガ施設の現状の把握と、過去のマンガ展の資料の収集を行う。

マンガ施設については、アンケート調査、実地踏査で得た情報を基に、運営主体、施設の中心機能の種別、建築規模などについても比較、考察を行う。アンケート調査は46館中35館を対象に行い、29館からの解答が得られた（回収率83%）

マンガ施設・マンガ展の共通の調査方法として、展示種別の分類を行い（表1）、展示物の特徴と傾向を把握する。

5. マンガ施設

5-1. 開館年度や地域

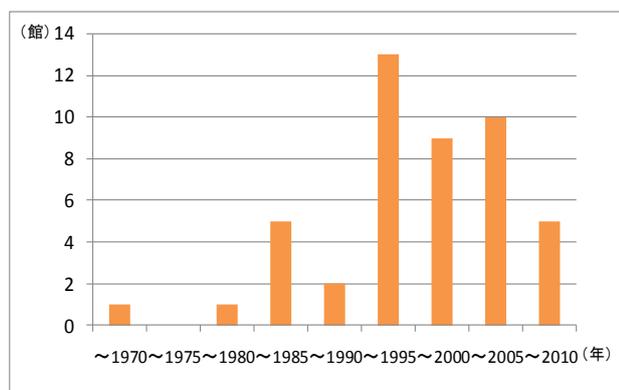


図1. マンガ施設の開館数

マンガ施設の所在地は、1989年以前は東京や大阪など、主要都市に建てられる場合がほとんどであったが、1990年以降は、全国的に建てられるようになった。図1から分かるように、その開館は1991年から1995年までの5年間にピークを迎えている。この時期に建てられたマンガ施設は、個人顕彰型の記念館である「宝塚市立手塚治虫記念館」（1994年）、マンガ全般を対象とした専門の美術館である「横手市増田まんが美術館」（1995年）、あるいは、図書館を中心機能にもつ「飛騨まんが王国」（1994年）などが見られ、立地の地域や機能などにも変化が見られた。

5-2. 展示種別

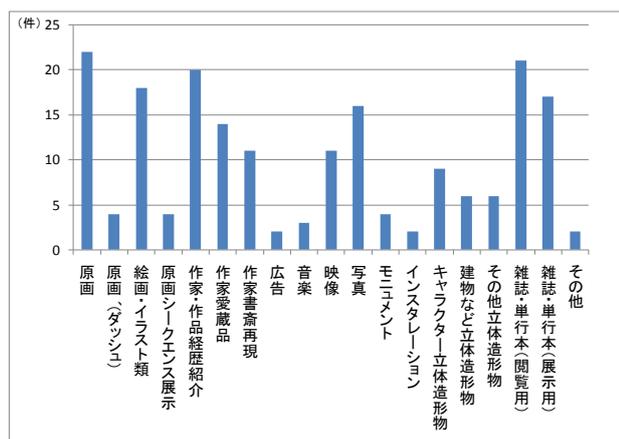


図2. マンガ施設における展示種別

展示種別について、図2の結果が得られた。原画が最も多く、続いて閲覧用としての単行本・雑誌等が多いという結果となった。

展示種別の選択数の平均値を、1989年以前、1990年代、2000年以降の時期で比較すると、それぞれ4.1種、5.5種、9.2種というように最近になるほど増加している結果となった。また、原画、モニュメント、インスタレーション、シークエンス展示の4つの種別が、2000年以降見られた新しい展示種別として挙げられる。

5-3. 中心機能と対象カテゴリー

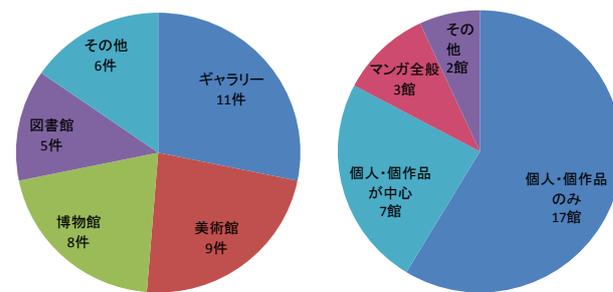


図3. 施設の中心機能 図4. 対象カテゴリー

図3より、マンガ施設における機能は割合として突出したものはなく、マンガをどの部分から捉えるかによってその機能は分かれるといえる。また、アンケートの解答結果の内、4分の1の施設が、中心機能について複数の選択をする結果となった。マンガから展開したメディアや表現は幅広く、それに対応するためには、特定の機能のみでは捉えきれないと考えられる。

次に対象とするカテゴリーについて、図4のような結果が得られた。

「千曲市ふる里漫画会館」（1985年）は、作家・近藤日出造を中心に、その他の作家・作品についても幅広く対象としている。このようにある程度中心となる作家を軸に、それ以外も幅広く受け入れるという施設が7件見られた。個人や一つの作品のみを対象としている施設は17件あり、上記の結果を合わせると、7割以上の施設が、個人・作品を対象の中心にしていることが分かる。

また「マンガ全般」を選択した施設は3件見られたが、その施設すべてが図3の中心機能の分類で図書館を選択している。マンガを体系的に収蔵する場合、第一次的資料となるのは書籍としてのマンガであり、量的な観点から見ても、図書館としての機能を持たざるを得ないといえる。

5-4. 運営主体と建築規模

マンガ施設の運営主体の割合は、図5から市区町村が半数以上を占めることが分かる。また、表2で見られるように、運営主体別に延床面積を比較すると、区市町村のお平均が1090㎡と最大の値となった。

2006年に開館した「京都国際マンガミュージアム」は、現存のマンガ施設の唯一の例外として、マンガ

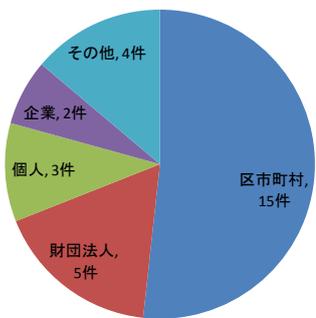


図5. マンガ施設の運営主体の割合

表2 マンガ施設の建築規模

※マンガ施設		延床面積	企画展示室面積
運営主体別	区市町村	1090.0 m ²	-
	財団法人	300.2 m ²	-
	個人	94.8 m ²	-
全体の平均		845.1 m ²	157.3 m ²
京都国際マンガミュージアム		5010.0 m ²	2467.5 m ²
川崎市市民ミュージアム		-	6650.6 m ²

※主体となる施設が付属施設である場合は除く

文化そのものをテーマとし、体系的な収蔵、総合的な研究や展示が行われている施設である。同ミュージアムの延床面積が5,010 m²、特別展が行われる展示室の面積は2,467.5 m²である。対して、マンガ施設の延床面積の平均値は、845.1 m²と5分の1にも満たない規模である。開館当初からマンガ部門を擁し、マンガに関する企画展が数多く開催されてきた「川崎市市民ミュージアム」の企画展示室の面積は、6,650.6 m²である。対して、マンガ施設における企画展示室の面積の平均値が157.3 m²であり、前者の2つの施設と比べ非常に規模が小さいことが分かる。これは現存のマンガ施設が、マンガの一部分のみに対象を絞っているため、施設や展示室も小規模になると考えられる。また、巨大なマンガ文化を展示・紹介する場としては、現存の施設では対応しきれないと考えられる。

5-5. 運営目的

図6から、運営目的について最も多かった選択は、個人・作品の顕彰であると読み取れる。前述したようにマンガ施設で取り上げる対象のカテゴリーが、7割以上が個人・作品を中心としているため、その結果に比例するように、「個人・作品の顕彰」が高い

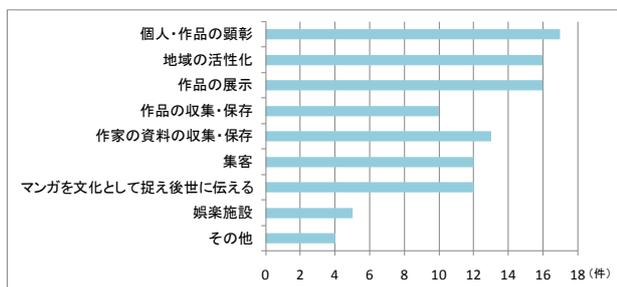


図6. マンガ施設の運営目的

割合を示しているといえる。

また、1990年代後半以降に開館した施設が、運営目的で「集客」を選択する施設の割合では、それ以前に開館した施設と比べ高くなっている。反対に、「作品の収集・保存」「作家の資料の収集・保存」「マンガを文化として捉え後世に伝える」という3つの項目は、2000年以降に開館した施設では選択する割合が低くなっている結果となった。このことは、マンガ施設は基本的に小規模なコンテンツを対象を絞ることに変わりはないが、マンガを文化として捉え、資料性・顕彰性の高い施設から、メディアとして幅広く、集客に期待できるような施設へと変化してきているといえる。これは、前述した展示種別数の平均値が増加傾向にあることや、2000年以降の新しい展示種別の出現も要因であると考えられる。

6. マンガ展

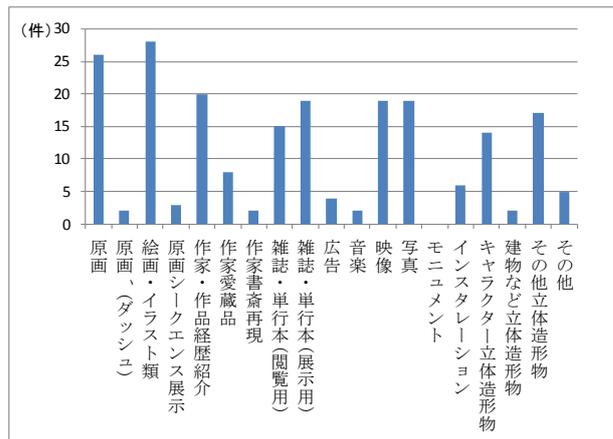


図7. マンガ展における展示種別

図7より、絵画・イラスト類、次に原画が高い割合を示しており、このことから、マンガ展は2次元的要素が強い展覧会であるといえる。また本格的にマンガ展が開催され始めたのが1990年以降ということもあり、時期や展示種別数で見られる傾向は少なかったが、原画(ダッシュ)、音楽、原画シークエンス展示の3種については、2005年以降のマンガ展から登場している。

マンガ展の契機になった「手塚治虫展」は13万人の入場者を記録し、数字上は大きな成功を収めたといえる。しかし、原画の展示が主であった本展では、以下のような指摘も見られた。

「創意工夫の乏しい展示内容の低さにおいても、空前にして絶後になるかもしれない、というのが率直な感想だ。展示の大半は、手塚マンガの主要作の原画をただ壁面に並べられただけのこと。〈中略〉原画それ自体は芸術作品でも何でも無い。」²⁾

原画はマンガの本質を捉えたものではなく、制作過程の1つに過ぎないため、原画の展示には上記のような批判は少なくない。「手塚治虫展」の開催以後、原画主体の展示から、どのように展示内容は変化していくべきか検討・模索が行われ、様々な形で示されてきたといえる。

対象のマンガ展を大きく4つのテーマに分類すると(図8)、「手塚治虫展」のような個人・作品をテーマとしたマンガ展が最も多い結果となった。しかし、海外や他の分野をテーマとしたマンガ展も、特に2000年以降増え始めており、テーマの変容が見られる。また、個人・作品を主軸としたマンガ展についても、展示種別の増加や展覧会コンセプトの多様化から、原画や物語性に囚われない充実した内容へと変化を遂げている。

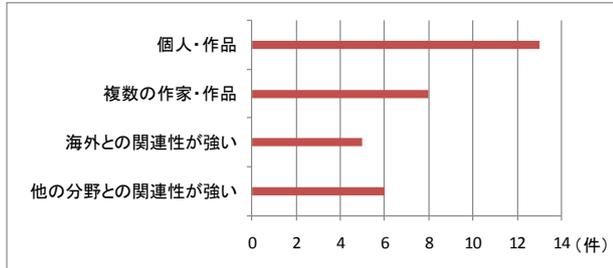


図8. マンガ展のテーマによる分類

7. 考察

7-1. マンガ施設

限られた収蔵機能と量的な問題、運営主体と建築規模の限界、マンガから展開するメディアの広がりや活発化、このそれぞれの要因が、互いの短所に作用するという非効果的な構造は、結果的に現在でも、マンガ施設がマンガの一部分に焦点を当て、特定のコンテンツに対象を絞ることを避けられない状況を生みだしていると考えられる。また、独自で企画展を開催する施設も少なくないが、その規模はマンガ展と比べ非常に小規模である。

上記のような閉塞的な状況を打破する意味で、また、マンガの文化的な関心の高まりに対応する意味でも、マンガを体系的に収蔵し、研究・閲覧・展示・交流といった主要機能が十分に機能し得る、マンガ専門の文化施設が求められている。現存、それに該当する施設は、2006年に開館した「京都国際マンガミュージアム」のみで、今後、同様の施設の建設がより必要になるといえる。同ミュージアムは現在、莫大な量のマンガのほとんどを対象に、第一次資料として雑誌・単行本など、書籍としてのマンガを中心に収蔵している。しかし同規模の施設を計画する場合、各施設で担当を分担し、互いに量的リスクを軽減するとともに、ネットワークを形成することが望ましいと考えられる。

7-2. マンガ展

原画の展示で特に危惧すべきは、マンガの断片のみを写しだすという行為が、マンガ特有の物語性を裁断することにあるだろう。「手塚治虫展」以後、模索段階にあるマンガ展は、原画の展示によって裁断された物語性をどのように補うか、ということ争点の1つとし、様々な試みが行われてきたと考えられる。物語の裁断を、立体への派生や、ストーリーの視覚化など、原画とは別の表現方法で補うことで、マンガ展を成り立たせているといえる。

その展示は、作家・作品のテーマ性、マンガ史による歴史的な位置づけ、マンガから展開したメディアを用いた3次元的要素、マンガとは異なる分野との関連性の提示、あるいは共同制作など、物語性とは別のマンガの特性を、原画の展示に付随する形で行われている。あるいは、マンガの物語性がある程度把握できるように、数ページ、あるいは一話分の原画をシークエンス形式で展示したり、図書資料の閲覧場所を展覧会の会場に併設する方法で、物語性そのものを補うケースも見られる。

しかし、最近行われたマンガ展の傾向から、紙媒体、2次元的表現からの脱却が行われ始めていると考えられる。資料性の高い原画の展示は、今後もマンガ展の1つの主流として続くと考えられるが、上記の流れを考えると、展覧会におけるマンガのストーリーや世界観の視覚化がますます盛んになると予想される。今後は、平面的な原画が主軸のマンガ展と、紙媒体から抜け出した立体的なマンガ展が二極的に行われていくと考えられる。

8. まとめ

今回の研究では、本来展示には向かないマンガが、どのように展示されるか、その種別を中心に調査を行った。結果としてマンガ施設、マンガ展ともに、平面的・二次元的要素が強い原画やイラストといった種別が、展示の中心となっていることが分かった。しかし、最近のマンガ展は、脆弱な紙媒体からの脱却や空間創造への試みも多く見られるようになり、マンガの多様さを紹介することのできる、1つの手段となっている。

一方、マンガ施設における対象のカテゴリーは、マンガの一部分のみを対象を絞ることを避けられない状況にある。展示機能を独自で備えている場合も多く見られたが、マンガ施設で開催する企画展は小規模で、マンガの現状に対応できているとは言い難い。マンガを総合的に捉えた専門の文化施設の建設、計画も始まったばかりである。

展示や収蔵といった主要機能を備えた、マンガの総合施設が拠点となり、コンテンツを持つマンガ施設、そして美術館で開催されるマンガ展が相互に関係を保ち、マンガの現状に対応できる構造を確立することが、今後の課題である。

謝辞

本研究の調査に当たり、各施設・展覧会の関係者の皆様には多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

【参考文献】

- 1) 表智之・金澤韻・村田麻里子:マンガとミュージアムが出会うとき、臨川書店、2009.7
- 2) 美術手帖、美術出版社、1998.12/2006.2
- 3) 今寿生:全国まんがMAP、音楽出版社、2004.6

1) <http://plaza.bunka.go.jp/information/exinfo/>

2) 公明新聞 1990.8.4